

巻頭言：大学図書館への期待	1
特 集：図書館総合展	
「第 27 回 図書館総合展 2025」ブース出展	2
「第 27 回 図書館総合展 2025」フォーラム	3
連 載：わたしのイチオシ 東海大学附属中央図書館「ライブラリウムの 4 つのメインルーム」	4

大学図書館への期待

神奈川県図書館協会副会長 神奈川大学図書館長 大橋 哲

神奈川大学は 11 学部を擁する総合大学であり、経営学部の教員である私は、神奈川大学図書館長の任を務めている。この度、本協会の副会長を拝命したことから投稿依頼をいただいた。ここでは大学教員としての立場から日頃感じていることを申し述べてみたい。

現在の学生たちは、レポート課題に取り組むにあたり、スマホでインターネットから得た情報を友人と持ち寄り、意見交換をするために図書館を利用することが多く、図書館を級友との交流の場ととらえているように見える。

蔵書に関しても、スマホで得た情報の証拠探しのような目的で利用されることが多いように思う。AI をあたり前に使い、それが示す答えとその答えに至る道筋を、図書館の書籍のなかにそのまま辿るのである。忙しい日常のなかで、効率よく有益な情報を選び抜きアウトプットする必要のある学生の行動としては、それが必然的な流れなのかもしれない。

この点、本学図書館では、自由に会話しながら学修できるラーニングコモンズや、スマホアプリを使った図書の貸出サービス、そのほか、様々な企画展示を展開するなど、学生本位のサービス提供に努め

ている。

こうした流れは理解できるものの、学生にレポートを課す教員としては、その本来の教育的意味は、学生独自の能動的な知的作業に基づいた気づきや論理の構築にあると考える。

ゆえに、今後の大学図書館は、学生の能動的な知的活動を支援する場としての機能を様々な手段で強化していく必要がある。そうしていくことで、学生達は、図書館蔵書に不変的な価値を見出すのではないか。本学を含む大学図書館においては、AI に追従する合意形成の場ではなく、学生の自由な創造性を育てるための知的交流の場となることが期待される。

以上、教育的見地からの感想であるが、もちろん、神奈川県に所在する大学図書館としての役割も重要視している。本学図書館では、両キャンパスにおける一般公開をはじめ、以前より KL-NET を通じ、本学で所蔵する学術資料を県内の全地域に還元している。今後も、神奈川県の知の拠点たべく、県内の各図書館と連携し、地域社会や市民のみならず、学術資料の提供・サービスの充実に努めていきたい。

特集：図書館総合展 1

「第 27 回 図書館総合展 2025」ブース出展 (10 月 22 日～24 日実施)

令和 7 年 10 月 22 日（水曜日）から 24 日（金曜日）の 3 日間、パシフィコ横浜にて開催された「第 27 回図書館総合展」に、今年度も当協会はブースを出展しました。多くの来場者と交流し、協会の活動を紹介することができました。

運営委員会発表によると、2025 年の会場全体の入場者数は 14,023 名で 2024 年の 12,786 名を大きく超えました。コロナ禍以降の開催としては順調に入場者数を増やしており、皆様の関心の高さを伺える盛況ぶりとなりました。

当協会のブースには 3 日間で延べ 556 名の方がお立ち寄りくださり、アンケートは 304 枚を配布し、皆さまから貴重なご意見やフィードバックをいただくことができました。

アンケートでは、当協会の活動を知らなかったというお声を多くいただく一方で「多くの館が参加していることに驚いた」「様々な館種を超えているところが良いと思う」「加盟館の図書館をよく使っている。図書館が好きだ」などのお言葉をいただきました。



(写真：ブース展示の様子)

加盟館一覧のポスターを掲示、リーフレット等を設置して来場者へ協会の活動を紹介し、多くの方々にお立ち寄りいただきました。

県内の美術館で図書室を担当されているという方がお越しになり、「協会のことは知らなかった。自館はまだ加盟していない。リーフレットを持ち帰って館内で紹介したい」という嬉しいお言葉もいただきました。

昨年度も人気だったノベルティの付箋は、デザインを一部変更し、今年度も 300 枚準備しました。アンケートにご協力いただいた方に付箋をお渡しすると「シンプルで使いやすい」と笑顔で受け取っていただき、すべて配布することができました。

スライド映像も用意し、省スペース化を図りながらも目を引く工夫を行いました。スライドの内容を始まりにしてブースをご覧くださった方々の中には、図書館関係者だけでなく一般の方や学生の姿も見られました。掲示された加盟館一覧を見て「自分がいつも使っている地元の図書館が載っている」と話し、リーフレット「神奈川の図書館一覧」を嬉しそうに受け取っていただけました。



(写真：「神奈川の図書館一覧」)

今年も、様々な館種を超えた連携のもと、無事に終了することができました。ブースで多くの方とコミュニケーションを取るなかで、一般の方々にも活動を知っていただく意義を実感するとともに、貴重なご意見やお話を伺うことができ、情報収集の場としてもとても稀有な機会となりました。今後の広報活動においてもこうした場を活用していきたいと考えています。

最後に、開催にあたりご協力いただいた加盟館の皆様、またブースに足を運んで温かいお言葉をかけてくださった皆様に心より御礼申し上げます。これからも、神奈川の図書館をより身近に感じていただけるような活動を進めてまいります。

(県立川崎図書館 並木哲也)

特集：図書館総合展2 図書館総合展フォーラムレポート

「ネットと生成 AI の時代に、なぜ読書？なぜ図書館？？？」

～児童・生徒・市民が未来を切り拓く探究学習の支援のために～

研修委員会では、今年度もパシフィコ横浜で開催された図書館総合展に参加し、10月22日（水曜日）に講演会を開催しました。

インターネットや生成 AI の登場により、情報の探し方や学び方は大きく変化しています。スマートフォンの存在により、手軽に自分の知りたい情報を調べることができ便利な時代になっていますが、手にしたその情報は本当に正しいものなのでしょうか。溢れる情報の中で、正しい情報に辿り着くことが困難になっています。

こうした時代の中で図書館は、信頼できる情報を提供するだけでなく、利用者が情報を見極め、主体的に学ぶ力を育む“知のよりどころ”としての役割を担う必要があるといえます。

本講演では中央大学職員かつ都留文科大学の非常勤講師である梅澤貴典氏をお招きし、ネット社会における図書館の新たな可能性を探りながら、情報におぼれないための学び方について講演していただきました。

（1）インターネットで何でも分かる時代に、なぜ学ぶのか？

インターネットを使っている学生の中には、日常のほとんどの問題はネットで解決しているという人もいます。しかし、就職活動などの「人生の一大事」でも、ネット上の情報のみで判断し、行動してよいのでしょうか。ネット上の情報は、嘘や不足しているものも多く、玉石混交で情報が溢れています。また、誰もがネットを使っているからこそ、得られる情報は誰もとと同じものになってしまいます。

そのため、より良い人生の選択をしていくためにも、出所が明確で網羅的に情報を収集する力

（探求力）、知識を複合してアイデアを生む力（独創性）、言葉と文章+α（イラストなど）で、人に伝える力（発信力）を身に付けていく必要があります。

（2）探求学習の意義とは

現在、学校では探求学習が必修となっています。

探究学習で一つのテーマに真剣に向き合って、「調べる」「考える」「発信する」ことの経験を積むと、3つのスキルで自ら解決できる力が育ちます。図書館司書自身もこれら3つのスキルを身に付けて、探求学習の指導ができるようになる必要があります。

（3）ネットと生成 AI の時代に、なぜ読書？なぜ図書館？

価値ある情報は、基本として有料が大原則ですが、図書館では無料で使うことができ、また、原典及び一次情報で学ぶことができます。また、分野や立場の偏りなく、体系的な情報で学べる知識基盤を持てます。ネットや生成 AI だけではこれらの情報を得ることは出来ません。ですが、検索することや知識を得る道具の一つとして活用していくことは可能です。

3つのスキルを身に付け育てるためには、図書館や本から得られる情報、ネットや生成 AI を使いこなす力が必要となります。そして図書館司書もネットや生成 AI を理解し、その特性を知っておく必要があるといえるでしょう。

ネットと生成 AI の時代に、読書や図書館はどう必要であり、どうなっていくべきなのか。具体的な例や数多くの講演を行っている体験談を交えて、多角的な視点から自らの考えを振り返るような講演をしていただき、新たな発見や多くの学びがありました。



（神奈川県図書館協会 研修委員会）

連載 わたしのイチオシ

東海大学附属中央図書館「ライブラリウムの4つのメインルーム」

いま「私のイチオシ」といえば、2025年4月にオープンした湘南キャンパス4号館の中央図書館です。足掛け5年の紆余曲折を経て、ようやく理想の施設ができました。

もともとは2020年、コロナ禍でキャンパスが静かになった折に合わせ、中央図書館を新築する計画が立案されました。しかし諸般の事情で具体化せず、外部書庫に多くの蔵書を預けたままの状態が続きました。2022年に本学は「日本まるごと学び改革実行プロジェクト」の名のもとに札幌から九州熊本までの全てのキャンパスで改組を行い、国内最多の23学部が連なる新しい東海大学が生まれましたが、その研究・教育資源を活かす機能を求める声が高まり、2023年度末、もとの4号館で中央図書館を復活させる決断が下されました。

そこから急ピッチで設計が行われ、2024年夏には施工が始まります。私たちが心がけたのは「理想の図書館をつくる」こと。それは「元の場所に戻るけど、全く新しいコンセプトをかたちにする」という思いに支えられています。Librarium（ライブラリウム：Liber=本のある-arium=環境を改めて考える）という新名称にそれは表れています。「海底から宇宙まで」を学びの領域として捉え、「先駆けであること」を研究理念としてきた本学らしい図書館を作ろうと私たちは考えました。



Islands (アイランズ 島々)：大学の研究成果をアピールする展示書架を中心に構成。（一階：開架）

• Ocean (オーシャン=大洋)：グローバルに広がるプロジェクト資料とミーティングスペースで構成。（一階：開架）



いちばん大事にしたことは、「共同学習」環境の実装です。その結果旧来の図書館の「静粛」な「読書」に限られた利用イメージから脱し、「探究」に軸足を置いたさまざまなスタイルの過ごし方が可

能な小空間を組み合わせ、個性的な4つのメインルームが出来上がりました。本や資料との距離、集中の度合い、どんな対話や行動を喚起すべきかを考え、それに適したオリジナル書架と机・椅子など什器を配しました。学生たちはそれぞれの「居場所」を発見し、いま快適に学習を行っています。



• Constellation (コンステレーション=星座)
文系書架（二階：開架）

• Universe (ユニヴァース=銀河) 理系書架（二階：開架）



先行して耐震工事を施した壁や柱を動かさないという条件が、逆にプラスに働いた格好です。このメイン4ルームの中にもワークショップ可能なコミュニケーションスペースを設け、半閉架書庫ゾーンに静寂室を、さらには通路にも書架を置いて交流エリアにするなどの工夫もできました。

こうした小空間の働きを支えるのが、図書館の機能を拡張するデジタル技術です。4号館奥の小規模な閉鎖スペースを生かし、コンテンツラボ（図書や資料の電子化を推進する施設）を設け、大型スクリーンや配信スタジオ、バリアフリー教材の作成が可能な機材を揃えました。さらにネットワークで分館やキャンパスに散らばるコモンスペースを結ぶことが期待されています。まさに大学全体が「どこでも図書館」になる――



そのハブとなる施設がこの中央図書館なのです。

どうか東海大学の湘南キャンパスにお越しの際は、ライブラリウムで「未来の図書館」を想像していただければと思います。

（東海大学附属図書館長 水島久光）